聴覚障害者の国際スポーツ大会「東京デフリンピック」が15日に開幕する。競技観戦は、なじみの薄かった手話やデフスポーツに触れる絶好の機会。ろう者の大会応援アンバサダーと、選手団をサポートする手話通訳士に見どころを聞いた。

協働する機会増えて

さとう・はるか　1997年、千葉県出身。学術分野の手話通訳も手がける。

手話通訳士　佐藤 晴香さん

日本デフ水泳協会のサポートスタッフとして国内選手の練習や合宿で、耳が聞こえるコーチの話を選手に手話で伝えたり、ろう者の選手の話をコーチやスタッフに通訳したりしている。

学生時代に競泳や水球に打ち込んだ経験から、2022年からデフ水泳に関わっている。手話を使う選手とそうでない選手がいれば、コーチやスタッフにもろう者、難聴者、聴者がおり、通訳は工夫が必要だ。

例えば、選手が目線を下にしてトレーニングをしている際、前を向いたタイミングで目線を合わせて改めて指導するようトレーナーに助言している。

選手とコーチの会話に通訳が加わることで正確にやりとりできるケースがある一方、直接話すことで関係が深まる場合もある。聞こえ方に関係なく、対等にコミュニケーションできる場となるよう試行錯誤の日々だ。

手話を始めたのは大学生の時だ。知らない世界に興味を抱き、ろう者の集まりなどに参加するようになった。

同じ場所にいても、私は周囲の様子を覚えていないのに、ろう者の知人は映像で再現するように鮮明に手話で表現していた。聞こえないことは、身の回りの捉え方が違うことだと気付き、のめり込んだ。聞こえない人と聞こえる人が一緒に物事に取り組み、互いの見方の違いを知れば、面白さを感じると思う。

大会には多くのろう者、難聴者が参加する。（スタートの合図など）音声を介して進行するのではなく、視覚を中心とした環境で進められる競技を観戦すれば、新たな驚きがあるのではないか。こうした経験をきっかけに、聞こえない人と聞こえる人が協働する機会が増えてほしい。

選手のしぐさ 注目を

かわまた・いくみ　1989年、栃木県出身。勤務先の日本財団で、アジア地域のろう者の教育支援事業に従事。

ろう者　川俣 郁美さん

3歳に高熱で両耳が聞こえなくなり、ろう者になった。デフリンピックの大会応援アンバサダーとして、小学校の出前授業やイベントで大会のことだけでなく、手話やデフの世界の豊かさを発信してきた。

ろう者は「かわいそうな人」というイメージを強く持たれがちだ。しかし、手話という言語を通じて生まれた文化があり、出前授業では魅力や文化の多様性について説明している。

大会観戦では選手のしぐさに注目してほしい。団体競技やダブルスの試合中、相手に見えないように手話で意思疎通するのが基本だが、実際と異なる戦略をあえて手話で見えるように交わして相手を惑わせることもある。音が聞こえないので、球技では相手選手の目線からボールの位置を把握する。

大会では、さまざまな手話が飛び交っている。観戦を通じて興味を持ってもらい、手話がありふれた社会になってほしい。

ろう者の子どもにも大会を見てもらいたい。障害のある人とない人が同じ教室で学ぶインクルーシブ教育の普及や補聴器の機能向上で、特別支援学校に通う児童・生徒が減り、ろう者の大人に幼少時から知り合う機会が減っているからだ。

普通学校に通っていた私も中高生の頃までろう者の知り合いができず、将来が不安だった。たまたま参加した手話の集会で、社会で活躍するろう者と出会い、米国留学などに挑戦する気持ちが湧いた。

子どもたちには、選手をはじめ大会に携わる人から、ロールモデルを見つけてもらいたい。「耳が聞こえなくても大丈夫。楽しい人生が待っている」と前向きな気持ちになってほしい。

▲11 月 9 日 福島民友新聞掲載

記事から知り得たこと

調べてわかったこと、考えたこと

疑問に思ったこと、調べてみたいこと

聞こえない、聞こえにくい、という人たちと共に生きていける社会にするためには何が必要でしょうか。